

## ℓ 進層の Euler 数 (加藤和也氏との共同研究)

東京大学・数理科学研究科 斎藤 毅 (Takeshi Saito)  
 Department of Mathematical Sciences,  
 University of Tokyo

$F$  を標数  $p > 0$  の代数閉体,  $U$  を  $F$  上スムーズな次元  $d$  の分離有限型スキームとする.  $\ell$  を  $p$  と異なる素数とし,  $\mathcal{F}$  を  $U$  上のスムーズ  $\ell$  進層とする.  $\mathcal{F}$  の Euler 数  $\chi_c(U, \mathcal{F})$  は,

$$\chi_c(U, \mathcal{F}) = \sum_{q=0}^{2d} (-1)^q \dim H_c^q(U, \mathcal{F})$$

で定義される.  $\mathcal{F}$  が定数層  $\mathbb{Q}_\ell$  のときは,  $\chi_c(U, \mathbb{Q}_\ell)$  を  $\chi_c(U)$  で表す.

$d = 1$  のときは, Euler 数  $\chi_c(U, \mathcal{F})$  は, Grothendieck-Ogg-Shafarevich 公式

$$\chi_c(U, \mathcal{F}) - \text{rank } \mathcal{F} \cdot \chi_c(U) = \text{deg Sw}(\mathcal{F})$$

で求められる ([1] Exposé X). ここでは, 一般次元の  $U$  に対し, Swan 類  $\text{Sw}(\mathcal{F})$  を無限遠に台をもつ 0 サイクル類として定義し, Grothendieck-Ogg-Shafarevich 公式の高次元化を与える. 詳細はプレプリント [2] にあるので, ここでは概要だけを述べる.

### 1 Swan 類と Grothendieck-Ogg-Shafarevich 公式の高次元化

まず,  $\ell$  進層の Swan 類を定義する.  $U$  と  $\mathcal{F}$  を上のとおりとし,  $U \rightarrow X$  を  $F$  上の固有スキームへの開うめこみとする. ここでは, 話を簡単にするため, 次の仮定をおく.

1.  $\mathcal{F}$  は,  $U$  の有限エタール Galois 被覆  $f: V \rightarrow U$  上で, 定数層となる.
2. カルテシアン図式

$$\begin{array}{ccc} V & \longrightarrow & Y \\ f \downarrow & & \downarrow f \\ U & \longrightarrow & X \end{array}$$

で,  $Y$  は  $F$  上固有スムーズかつ,  $V$  は  $Y$  の単純正規交叉因子  $D$  の補開部分スキームとなるものがある.

一般にはこれらの条件はみたされないが、次のように修正することで、一般の場合も定義される。1では、 $\mathcal{F}$ の法 $l$ 還元を自明化する被覆をとる。そして、下に与えるSwan類 $\text{Sw}(\mathcal{F})$ の定義では、跡の代わりにBrauer跡を用いる。2では、特異点解消の代わりにオルタレイションを用いる。

$D_1, D_2, \dots, D_m$ を $D$ の既約成分とする。 $(Y \times Y)' \rightarrow Y \times Y$ を、閉部分スキームの族 $D_1 \times D_1, D_2 \times D_2, \dots, D_m \times D_m$ でのブローアップとする。すなわち、これらを定めるイデアル層の積によるブローアップとする。 $(Y \times Y)'$ は $2d$ 次元の固有スムーズスキームである。対角射 $Y = \Delta_Y \rightarrow Y \times Y$ は、 $\log$ 対角射 $Y = \Delta_Y^{\log} \rightarrow (Y \times Y)'$ をひきおこす。

$\sigma \in G$ に対し、 $\sigma: V \rightarrow V$ のグラフを $\Gamma_\sigma \subset V \times V$ で表し、その $(Y \times Y)'$ での閉包を $\bar{\Gamma}_\sigma$ とする。 $s_{V/U}(\sigma) \in CH_0(Y \setminus V)$ を、

$$s_{V/U}(\sigma) = \begin{cases} -(\bar{\Gamma}_\sigma, \Delta_Y^{\log})_{(Y \times Y)'} & \sigma \neq 1 \text{ のとき} \\ -\sum_{\tau \neq 1} s_{V/U}(\tau) & \sigma = 1 \text{ のとき} \end{cases}$$

で定める。 $V \rightarrow U$ はエタールだから、 $\sigma \neq 1$ のとき、 $\Gamma_\sigma$ と対角 $\Delta_V$ の共通部分は空である。これより、交点積 $(\bar{\Gamma}_\sigma, \Delta_Y^{\log})_{(Y \times Y)'}$ は、 $CH_0(Y \setminus V)$ の元を定める。 $CH_0$ は0サイクルの有理同値類のなすChow群を表す。

$M$ を $\mathcal{F}$ に対応する $G$ の表現とすると、Swan類 $\text{Sw}(\mathcal{F}) \in CH_0(X \setminus U)_\mathbb{Q}$ は、

$$\text{Sw}(\mathcal{F}) = \frac{1}{|G|} \sum_{\sigma \in G} \bar{f}_* s_{V/U}(\sigma) \text{Tr}(\sigma: M)$$

で定義される。添字 $\mathbb{Q}$ は $\otimes \mathbb{Q}$ を表す。正確にいうと、上の定義では、 $\text{Sw}(\mathcal{F})$ は $CH_0(X \setminus U)_\mathbb{Q}$ の元として定義されることになるが、簡単な修正により、 $CH_0(X \setminus U)_\mathbb{Q}$ の元として定義される。この修正は実は不要であり、同じ元を定めるものと予想される。

$Y \rightarrow X$ が代数曲線の有限射であるときは、上の構成は、通常のSwan導手の定義([1] Exposé X)の、幾何的な言換えである。

このSwan類を使って、Grothendieck-Ogg-Shafarevich公式の高次元化が定式化される。

**定理 1**  $U$ を $F$ 上のスムーズ・スキーム、 $X \supset U$ をコンパクト化とする。 $U$ 上のスムーズ $l$ 進層 $\mathcal{F}$ に対し、

$$\chi_c(U, \mathcal{F}) - \text{rank } \mathcal{F} \cdot \chi_c(U) = \text{deg Sw}(\mathcal{F})$$

がなりたつ。

定理1の証明は、標準的な論法により、跡公式

$$\text{Tr}(\sigma: H_c^*(V, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{deg } (\bar{\Gamma}_\sigma, \Delta_Y^{\log})_{(Y \times Y)'}$$

( $\sigma \neq 1$ )に帰着される。左辺は、交代和 $\sum_{q=0}^{2d} (-1)^q \text{Tr}(\sigma: H_c^q(V, \mathbb{Q}_\ell))$ を表す。跡公式の証明は、節を改めて解説する。

## 2 開多様体に対する Lefschetz 跡公式

記号を変えて、この節では、 $X$  を  $F$  上の固有スムーズ・スキームとし、 $U$  を  $X$  の単純正規交叉因子  $D$  の補開部分スキームとする。  $\Gamma \subset U \times U$  を閉部分スキームとし、  $p_1, p_2 : \Gamma \rightarrow U$  で各成分への射影との合成を表す。

代数的対応  $\Gamma$  のコホモロジーへの作用  $\Gamma^* = p_{1*} \circ p_2^* : H_c^q(U, \mathbb{Q}_\ell) \rightarrow H_c^q(U, \mathbb{Q}_\ell)$  は、無条件には定義されないが、  $p_2 : \Gamma \rightarrow U$  が固有なら定義される。  $\bar{\Gamma} \subset X \times X$  を  $\Gamma$  の閉包とすると、  $p_2 : \Gamma \rightarrow U$  が固有という条件は、

$$(!) \quad \bar{\Gamma} \cap (D \times X) \subset \bar{\Gamma} \cap (X \times D)$$

と同値である。交代和  $\text{Tr}(\Gamma^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = \sum_{q=0}^{2d} (-1)^q \text{Tr}(\Gamma^* : H_c^q(U, \mathbb{Q}_\ell))$  に対するよい跡公式を得るため、条件 (!) よりも強い条件を設定する。

前節と同様に、  $(X \times X)' \rightarrow X \times X$  を、  $D_1 \times D_1, D_2 \times D_2, \dots, D_m \times D_m$  でのブローアップとする。  $(D \times X)', (X \times D)' \subset (X \times X)'$  を、それぞれ  $D \times X, X \times D$  の固有変換とする。このとき、次の跡公式が得られる。

**定理 2**  $\Gamma \subset U \times U$  を閉部分スキームとし、  $\bar{\Gamma}' \subset (X \times X)'$  をその閉包とする。条件

$$(!') \quad \bar{\Gamma}' \cap (D \times X)' \subset \bar{\Gamma}' \cap (X \times D)'$$

を仮定する。このとき、条件 (!)  $\bar{\Gamma} \cap (D \times X) \subset \bar{\Gamma} \cap (X \times D)$  がなりたち、等式

$$\text{Tr}(\Gamma^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{deg}(\bar{\Gamma}', \Delta_X^{\log})_{(X \times X)'}$$

がなりたつ。

定理 2 から定理 1 を導くには、  $\Gamma = \Gamma_\sigma$  が、定理 2 の条件 (!') を満たすことを確かめればよい。

以下、定理 2 の証明の方針を述べる。まず、  $X = U$  の場合の通常の跡公式の証明を、簡単に復習する。  $[\Gamma] \in H^{2d}(X \times X, \mathbb{Q}_\ell(d))$  を  $\Gamma$  のサイクル類とし、  $[\Delta] \in H^{2d}(X \times X, \mathbb{Q}_\ell(d))$  を  $\Delta$  のサイクル類とする。  $\cup : H^{2d}(X \times X, \mathbb{Q}_\ell(d)) \times H^{2d}(X \times X, \mathbb{Q}_\ell(d)) \rightarrow H^{4d}(X \times X, \mathbb{Q}_\ell(2d))$  をカップ積とし、  $\text{Tr} : H^{4d}(X \times X, \mathbb{Q}_\ell(2d)) \rightarrow \mathbb{Q}_\ell$  を跡写像とする。Lefschetz 跡公式 ([1] Exposé III) より、

$$\text{Tr}(\Gamma^* : H^*(X, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{Tr}([\Gamma] \cup [\Delta])$$

がなりたつ。カップ積と交点積、および跡射と次数射の両立性より、

$$\text{Tr}([\Gamma] \cup [\Delta]) = \text{deg}(\Gamma, \Delta)_{X \times X}$$

である。これより、  $\text{Tr}(\Gamma^* : H^*(X, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{deg}(\Gamma, \Delta)_{X \times X}$  がえられる。

一般の場合には、この証明を次のように修正する。  $U \times U \xrightarrow{j_1} X \times U \xrightarrow{j_2} X \times X$  を開埋め込みとする。条件 (!) より、サイクル類  $[\Gamma] \in H^{2d}(X \times X, R_{j_2*} j_{1!} \mathbb{Q}_\ell(d))$  が定義される。同様に、  $[\Delta] \in H^{2d}(X \times X, j_{2!} R_{j_1*} \mathbb{Q}_\ell(d))$  が定義される。  $\cup : H^{2d}(X \times X, R_{j_2*} j_{1!} \mathbb{Q}_\ell(d)) \times H^{2d}(X \times X, j_{2!} R_{j_1*} \mathbb{Q}_\ell(d)) \rightarrow H^{4d}(X \times X, j_{2!} j_{1!} \mathbb{Q}_\ell(2d))$  をカップ積

とし,  $\text{Tr} : H^{4d}(X \times X, j_{2!}j_{1!}\mathbb{Q}_\ell(2d)) \rightarrow \mathbb{Q}_\ell$  を跡写像とすると, Lefschetz 跡公式 ([1] Exposé III) より,

$$\text{Tr}(\Gamma^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{Tr}([\Gamma] \cup [\Delta])$$

がなりたつ.

$\text{Tr}([\Gamma] \cup [\Delta]) = \text{deg}(\bar{\Gamma}', \Delta^{\log})_{(X \times X)'}$  を示す.  $(X \times X)^\sim = (X \times X)' \setminus ((D \times X)' \cup (X \times D)')$  とおき,  $\tilde{\Gamma} = \bar{\Gamma}' \cap (X \times X)^\sim$  とおく.  $(X \times X)^\sim \xrightarrow{j_1'} (X \times X)' \setminus (X \times D)' \xrightarrow{j_2'} (X \times X)'$  を開うめこみとする. 仮定 (!) より, サイクル類  $[\tilde{\Gamma}] \in H^{2d}((X \times X)', Rj_{2*}'j_{1!}'\mathbb{Q}_\ell(d))$  が定義される. 同様に,  $[\Delta^{\log}] \in H^{2d}((X \times X)', j_{2!}'Rj_{1*}'\mathbb{Q}_\ell(d))$  も定義される. 標準写像  $H^{2d}(X \times X, Rj_{2*}j_{1!}\mathbb{Q}_\ell(d)) \rightarrow H^{2d}((X \times X)', Rj_{2*}'j_{1!}'\mathbb{Q}_\ell(d))$ ,  $H^{2d}(X \times X, j_{2!}Rj_{1*}\mathbb{Q}_\ell(d)) \rightarrow H^{2d}((X \times X)', j_{2!}'Rj_{1*}'\mathbb{Q}_\ell(d))$  は同型であり, サイクル類  $[\Gamma], [\Delta]$  を, それぞれ  $[\tilde{\Gamma}], [\Delta^{\log}]$  にうつす. 図式

$$\begin{array}{ccc} H^{2d}(X \times X, Rj_{2*}j_{1!}\mathbb{Q}_\ell(d)) & \longrightarrow & H^{4d}(X \times X, j_{2!}j_{1!}\mathbb{Q}_\ell(2d)) \\ \times H^{2d}(X \times X, j_{2!}Rj_{1*}\mathbb{Q}_\ell(d)) & & \\ \downarrow & & \downarrow \\ H^{2d}((X \times X)', Rj_{2*}'j_{1!}'\mathbb{Q}_\ell(d)) & \longrightarrow & H^{4d}((X \times X)', j_{2!}'j_{1!}'\mathbb{Q}_\ell(2d)) \\ \times H^{2d}((X \times X)', j_{2!}'Rj_{1*}'\mathbb{Q}_\ell(d)) & & \end{array}$$

は可換であり,

$$\text{Tr}([\Gamma] \cup [\Delta]) = \text{Tr}([\tilde{\Gamma}] \cup [\Delta^{\log}])$$

が得られる. さらに, カップ積と交点積および, 跡写像と次数射の両立性より,

$$\text{Tr}([\tilde{\Gamma}] \cup [\Delta^{\log}]) = \text{deg}(\bar{\Gamma}', \Delta^{\log})_{(X \times X)'}$$

である. よって,  $\text{Tr}(\Gamma^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{deg}(\bar{\Gamma}', \Delta^{\log})_{(X \times X)'}$  が示された.

おわりに, 跡公式の例を 2 つあげる. どちらの例でも,  $U = \mathbf{A}^1 \subset X = \mathbf{P}^1$  とする. このとき,  $H_c^q(U, \mathbb{Q}_\ell)$  は,  $q = 2$  のとき 1 次元で, それ以外のときは 0 である.

例 1.  $F : U \rightarrow U$  を Frobenius 自己準同型とする.  $F^*$  の  $H_c^2(U, \mathbb{Q}_\ell)$  への作用は  $p$  倍であり,  $\text{Tr}(F^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = p$  である. 転置  $F_*$  の  $H_c^2(U, \mathbb{Q}_\ell)$  への作用は 1 倍であり,  $\text{Tr}(F_* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = 1$  である.  $\text{deg}(\Delta, \Gamma_F)_{(X \times X)^\sim} = p$  である.

$F^*$  は条件 (!) をみたし,  $\text{Tr}(F^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{deg}(\Delta, \Gamma_F)_{(X \times X)^\sim} = p$  がなりたつ.  $F_*$  は条件 (!) をみたさず,  $\text{Tr}(F_* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = 1 \neq \text{deg}(\Delta, \Gamma_F)_{(X \times X)^\sim} = p$  である.

例 2.  $f : U \rightarrow U$  を自己同型  $x \mapsto x + 1$  とする. このとき,  $f^*$  の  $H_c^2(U, \mathbb{Q}_\ell)$  への作用は 1 倍であり,  $\text{Tr}(f^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = 1$  である. このときも条件 (!) がなりたち,  $\text{Tr}(f^* : H_c^*(U, \mathbb{Q}_\ell)) = \text{deg}(\Delta, \Gamma_f)_{(X \times X)^\sim} = 1$  である.

## References

- [1] A. Grothendieck et. al., *Cohomologie  $\ell$ -adique et Fonction L*, SGA 5, Springer LNM 589 (1977).
- [2] K. Kato, T. Saito, *Ramification theory of schemes over a perfect field*, preprint. math.AG/0402010